

収蔵館ニュース

第22号
(改題通算48号)

K U R U M E C I T Y

2026.3

● CONTENTS

- ・新収蔵資料紹介
- ・守り、伝える
- ・活かし、伝える

- ・六ツ門図書館展示コーナー
戦後80年／むかしのくらし
六ツ門だよ

- ・トピックス
収蔵資料の燻蒸／収蔵資料審議会
有馬記念館展示／各種ご案内



熊谷鏡子コレクションの一部。手作りならではの温かい表情や鮮やかな色彩に富んだウサギやウマ、クジラ、雛人形など様々な造形のものゝ蒐集されています。

新収蔵資料紹介

郷土玩具に魅せられて

こつこつ集めて西へ東へ

「熊谷鏡子コレクション」

本資料群は、全国各地で蒐集された郷土玩具並びに郷土人形を中心とし、その数は実に2839点に及びます。人形の大半は、現地に赴いて入手されました。

郷土玩具は、その土地の自然や信仰、暮らしの中から生まれた素朴な玩具です。土や木、和紙、藁などのような身近な素材を用い、張り子や木彫、土人形といった手仕事の製法で作られてきました。

子どもの健やかな成長や家内安全、五穀豊穡への願いを込め、干支や動物、縁起物の他、芝居の登場人物など様々なモチーフのものが作られています。大きさも、50cm程の大きなものから僅か数cmの小さなものまで様々です。

蒐集したものの中には、制作者の高齢化や後継者不足などにより、今は制作されていないものもあります。郷土玩具の歴史を今に伝える貴重な資料です。

新収蔵資料紹介

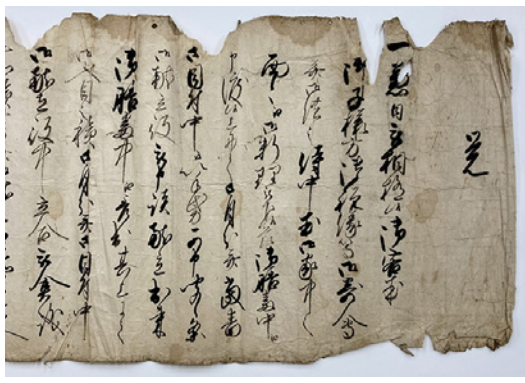
2025. 1
▼
2025.12

久留米藩の江戸藩邸に勤務 藩士福永家の多様な資料群

「福永家資料」

旧久留米藩士福永家に伝来したもので、江戸時代の武家文書を中心とする総数49点の資料群です。

福永家は、久留米藩初代藩主有馬豊氏に「御料理方」として召し出され、代々藩士として勤めることとなります。やがて3つの家に分かれますが、いずれも江戸藩邸に勤務し、



御料理方や御台所方の勤方 10 か条を定めた覚。第1条は、藩主が振る舞う料理について、献立・予算を決定するプロセスを記す

藩主やその家族の側近くに仕えました。幕末の参勤交代制度の廃止に伴い、久留米藩領の江戸屋敷に移住したと伝わります。

本資料群は、経緯は不明ですが、3家それぞれに関わる資料が伝来し、相互の縁組等によつて集約されたものと推測されます。具体的には、3家の系譜や由緒書、「御料理方」の勤めに関する捉書、久留米城下町の切絵図、武術の免許状など、多様な内容で構成されています。



文政3年（1820）に福永篤之丞から福永萬次郎宛てに出された槍術の免許。篤之丞は、藩主子息の槍術稽古の相手も務めた

形見分けされた旧蔵資料 寄贈により再び集まる

「西原柳雨関連資料」

庄島町出身で、日本三大古川柳研究家の一人である西原柳雨（1865〜1930）に関する資料群です。柳雨は古川柳研究の著作を多く残し、晩年には福岡日日新聞（西日本新聞の前身）において柳壇の選者となり、九州での川柳振興に寄与しました。

柳雨の没後、その旧蔵資料は親族に形見分けされました。そのうち、柳雨の曾孫の井手香織氏に伝来した原稿や校正綴りなど計54点は、令和4年度に市が寄贈を受けました。今回の資料群は、同じく柳雨の曾孫の

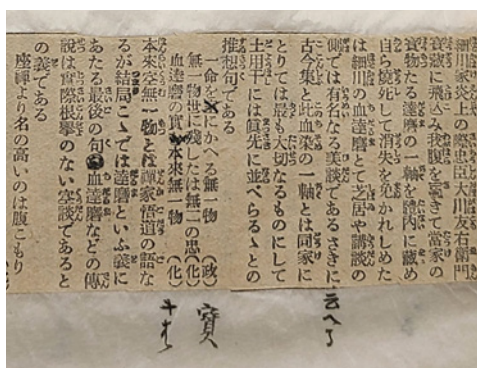


(右)「筑後新聞所載 川柳九州志」
(左)「大正十三年度 新聞投稿切抜 第三」
左の冊子には記事執筆時の柳雨の年齢が書かれる

西原昭彦氏から寄贈されたもので、内容は柳雨が執筆した新聞連載記事の切り抜き2冊、昭和戦後期に増訂新版された柳雨の著作5冊、没後にまとめられた柳雨の伝記1冊です。

切り抜きは2冊とも柳雨が作成しており、うち1冊は筑後新聞に大正10年（1921）6月から同年12月まで掲載された「川柳九州志」を、もう1冊は都新聞などに掲載された寄稿文をまとめたものです。柳雨は記事が世に出た後も、自身の文章や執筆歴を記録し、また研究内容の精度を高めました。

新たに寄贈された資料は、柳雨の業績と活動をより幅広く後世に伝えていきます。



「川柳九州志」の切り抜きをまとめた冊子
記事中には記号や線、記事のそばには柳柳が書き込まれる

巨峰のまちへ

越智先生と田主丸の人々

「越智通重氏関係資料」

本資料群は、田主丸町を巨峰の大産地に育てた越智通重（1916～81）が編集した雑誌、栽培日誌、研究ノート、押し葉標本、葡萄や食に関する収集物など1067点で、年代は明治後半から平成11年（1999）に及びます。

越智通重は、巨峰の生みの親、大井上康の門下生で、昭和30年（1955）に田主丸に招かれ、地元の人々と共に九州理農研究所を立ち上げ、栽培技術を深めました。同32年（1957）、有志5人と共に巨峰の改植・栽培に初めて成功して

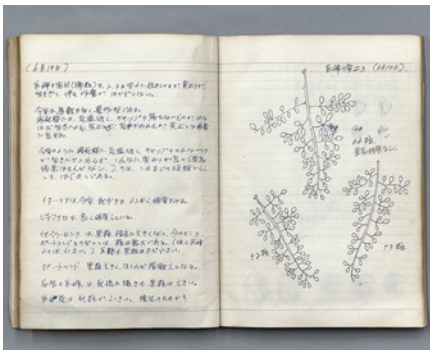


「果実文化」昭和36年（1961）1月創刊。翌年7月に「理農技術」に合併されるまで田主丸から情報を発信した

います。その後、巨峰栽培は田主丸の耳納北麓を中心に広がり、人々は観光巨峰狩りを成功させ、田主丸は巨峰のまちとなりました。

雑誌「果実文化」（上段写真）は、九州理農研究所内の果実文化協会から発行されたもので、栽培農家の寄稿も交えた会員制月刊誌です。購読者は国内外に広がりました。

栽培日誌「葡萄の生態」（下段写真）には、葡萄の生育状況がスケッチを交えて詳細に記録されています。葡萄以外の果実はもとより、野菜、肉、魚など食全般に関すること、さらには食を取り巻く環境や市場調査までもが記されています。本資料群には、こうした日誌や研究ノートが多数含まれています。



「葡萄の生態」。このページのような観察記録以外に、食に関する新聞や雑誌の切り抜きも貼付されている

戊辰戦争の肩章や手旗

従軍日記が寄託から寄贈へ

「小川家資料」

久留米藩士小川弥八郎に関するもので、新政府軍として戊辰戦争に従軍した際の日記、肩章や手旗など総数7点が伝わります。平成23年度より寄託を受けていましたが、令和6年度に寄贈されました。

日記は慶應4年（1868）3月5日に国元の久留米を出発したところから始まり、上野戦争・奥州追討を経て、翌年1月11日に久留米に凱旋するまで、4冊にわたって記さ



新政府軍の手旗。大きさは縦43.2cm、横76.4cmで、右下隅に「筑後小川彌八郎宗高」と墨書されている

れています。

ここでは、共に残されてきた手旗に関する記事を紹介いたします。

弥八郎の「奥州出兵中日記」によると、慶應4年8月7日に久留米藩兵などの新政府軍が相馬城下に乗込んだ際、味方の手旗は赤1色とされていきました。その後、同24日に上半が赤・下半が白の2色の旗に変更されましたが、これが敵方に奪われてしまったため、白赤白の柄に改められました。実物が伝わるのは、この3柄目の手旗です。

また、肩章は錦裂に「総督府」印が押されたもので、手旗や日記とあわせて、弥八郎の従軍を証する貴重な資料です。



新政府軍の肩章。「官軍」の証で錦裂が用いられている。印文は「大総督府之印」とある。左は錦裂の拡大写真

上弓削村庄屋の古文書群 村の運営や生活を伝える

「緒方家資料（第2次）」

江戸時代の上弓削村（現・北野町上弓削）の庄屋を勤めた緒方家に伝来したものです。年代は江戸時代中期から昭和29年（1954）まで、内容は家系図のほか、物成帳や竿入帳といった土地関係の帳簿、役場関係の依頼や照会などの古文書を中心とし、総数261点に及びます。

これまで収蔵資料には、旧北野町域に由来するものが少なく、近世から近代にかけての上弓削村の行政文書を核とする本資料群は、第1次寄贈の「筑後川水吐新川見積絵図」（第21号掲載）とあわせて大変貴重です。



緒方家資料（第2次）の一部、「御物成滞納調子帳」「本郷地畑夏秋御物成名寄帳」「頼母志講帳」など、村政や地域に関する帳簿がよく残る

若林卓爾、各地の官職を歴任 そして、第5代久留米市長へ

「若林家資料」

本資料群は、旧久留米藩士若林家に伝来したものです。同家は、第5代久留米市長若林卓爾や儒者の若林残夢を輩出しています。本資料群の年代は江戸時代末期から昭和戦前期まで、内容は卓爾宛ての辞令書や履歴書、残夢の漢詩など総数43点です。

卓爾は明治6年（1873）以来、佐賀、熊本などの官庁に勤め、内務省勤務を経て岐阜県下各所で郡長を歴任しました。明治43年（1910）12月、迎えられて久留米市長となり、瓦斯事業の市営化など数々の事業を成し遂げました。また、日本赤十字社の活動にも貢献しています。



日本赤十字社正社員辞令
明治22年（1889）2月7日付けで、総裁彰仁親王・社長佐野常民の連名により若林卓爾に宛てたもので「正社員二列入」とある

新収蔵資料一覧

日付	資料名	点数	氏名	区分
12・26	自転車及び酒樽	2	光山 潔	寄贈
12・26	福永家資料（第2次）	14	福永 義征	寄贈
12・24	小倉敬止関係資料	9	真峯 雅子	寄贈
11・18	吉木家資料	1	吉木 祐介	寄託
8・19	若林家資料	43	若林 啓爾	寄贈
7・17	緒方家資料（第2次）	261	緒方 正明	寄贈
6・10	青木照夫家資料（第9次）	6	青木 照夫	寄贈
6・10	秩父宮同妃兩殿下御滞泊記念寫眞帖	1	草場 武司	寄贈
3・31	小川家資料	7	匿名	寄贈
3・28	熊谷鏡子コレクション	2839	熊谷 鏡子	寄贈
3・28	国鉄西鉄久留米駅発列車時刻表及び株式会社必勝堂広告	2	近澤 康治	寄贈
2・25	越智通重氏関係資料	1067	KYOHJAPAN(株)	寄贈
2・25	福永家資料	49	福永 義征	寄贈
2・25	西原柳雨閣連資料	8	西原 昭彦	寄贈
2・25	船曳鐵門和歌短冊一枚	1	田堀 雅尚	寄贈
2・25	竹野郡田主丸町開基之覚(写)	1	室町 律子	寄贈

ご案内 新収蔵資料紹介コーナー



令和4年度より、六ツ門図書館展示コーナー内に「新収蔵資料紹介コーナー」を設け、久留米市が新たに収蔵した歴史資料を月替わりで初公開しています。

各月の展示内容については、久留米市公式ホームページでお知らせしています。また、各月の閉会後にもご覧いただける「展示解説シート」を掲載しています。



守り、伝える

卷子装の書状を修理 本紙を守る保護紙に注目

令和5年度より、卷子装の戸田乾吉宛て書簡集を年に1巻ずつ修理しています。戸田乾吉は幕末の久留米藩士で、藩の近代化に貢献した人物です。令和6年度修理分は8通30紙からなり、全長は13mに及びます。

修理前は、本紙の継ぎ目が外れている箇所が多かったため、保存活用に適さない状態でした。本紙を補強する裏打ち紙はほぼ外れており、本紙にしわや折れが多数発生していました。

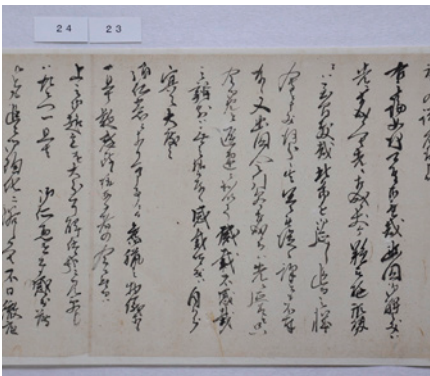


本紙に保護紙をつけている様子
本紙の天地に糊をつけて保護紙を貼る

《修理のここがおもしろい》

本紙同士を継ぎ直した後は、継いだ本紙全体に新たに裏打ちを行います。実はこのとき、本紙の天地（上下）に、保護紙と呼ばれる和紙を貼り足すひと手間を加えてから作業しています。保護紙は、本紙を保護して現状維持するためにつけられ、3mmほど残して裁断されます。保護紙のおかげで、本紙の天地に触れずに資料を扱うことができます。

修理後の卷子を見ると、本紙の天地に本紙と色味の異なる和紙がついていることが分かります。本紙と色味を揃えないのか気になるかもしれませんが、これは将来の修理時に、前回の補修箇所がどこか分かるようにしているためです。



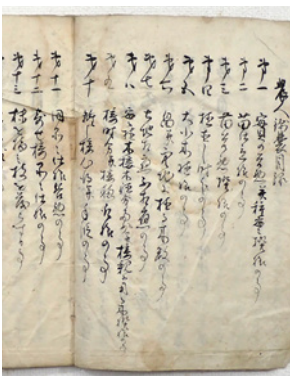
修理後の書状
保護紙は3mmほど残して裁断されている

活かし、伝える

筑後川遺産を構成する 楯づくりの古文書

江戸時代の久留米藩では財政立て直しのため、蠟燭の原料となる楯の栽培を奨励しました。竹野郡亀王組の大庄屋竹下周直が、寛延3年（1750）楯栽培の豊富な経験と知識を傾けて著した「農人錦之囊」という技術書があります。その内容は、楯実の善し悪しの選び方に始まり、苗の仕立て、接ぎ木、実の採り方、害虫の駆除など、30項目に及びます。

原本は現在のところ所在不明で、久留米市では、旧山本郡柳坂組大庄屋を勤めた上野家に伝来した写本を収蔵しています。



「農人錦之囊」目次の冒頭

令和7年5月1日、「楯の道」が、久留米市の筑後川遺産第3号として登録されました。筑後川遺産とは、市内に所在する固有の歴史的背景（ストーリー）で関連付けられた歴史遺産のまとまりのことで、令和3年にその登録制度が始まりました。

「楯の道」は、楯並木や製蠟を営んだ商家の旧宅など、16の歴史遺産で構成されています。本市収蔵「農人錦之囊」も、その1つです。11月29・30日に開催された「筑後川遺産登録記念『楯の道』特別展」では、久留米藩の楯の歴史と構成遺産の詳細が、時代ごとの楯の活用法と共に紹介されました。



「筑後川遺産登録記念『楯の道』特別展」のパネル展示
（11月29・30日、柳坂根の楯並木 ハゼまつり特設会場）

六ツ門図書館展示コーナー

戦後80年 平和資料展

「8・11久留米空襲を語りつなく」

会期：令和7年7月19日（土）

～9月7日（日）

令和7年は、終戦から80年の節目にあたります。久留米市では、昭和20年（1945）8月11日、久留米空襲により市街地は焦土と化し、214人もの尊い命が奪われました。年々戦争を体験された方が少なくなる中、この史実も風化しつつあり、「戦争は外国の話」「もし戦争になっても戦うのは兵士だけ」など、自分には関係ないと考える人が増えているとも言われます。

この節目の年に「8・11久留米空襲を語りつなく」と題して、《軍都・久留米》《銃後の暮らし》《8・11空襲、その時》という構成で戦時下に暮らす人々にスポットを当てた展示会を開催しました。

《軍都・久留米》では、軍司令部の写真、国民学校の教科書、「主婦

の友」「婦人倶楽部」などを使って、戦時下で国民の思想統制や戦争への協力体制が整えられていった事を伝えました。



展示会場の様子

《銃後の暮らし》では、軍需物資の献納や金属回収の写真、衣料切符などで物資不足を、勤労奉仕の絵葉書や学徒腕章で人手不足により中等学校以上の生徒は工場などで働いた事を紹介しました。また、「昭和のおうち」には国民服や防空頭巾、

〒830-0031 久留米市六ツ門町3-11
TEL: 0942-27-9281
FAX: 0942-27-7281

雑糞やリュックサックを置いて戦時中の住まいを再現しました。その他招集令状や出征時の写真、予科練の制服も展示しました。



戦時中の住まいを再現した「昭和のおうち」コーナー

《8・11空襲、その時》では、B24爆撃機の進路、焼夷弾の模型、焦土と化した市街地の写真、焼けた瓦やガラス片、犠牲者の体内に残された「二つの弾片」を展示。空襲の恐ろしさや爆撃の威力を視覚に訴えました。当時13歳の少年の日記「軍

国少年日記」の8月11日のページには、空襲を受けた時の緊迫した様子が綴られており、熱心に読まれる来場者の姿も見られました。

会場では、戦争体験者の方の証言DVD上映も行い、来場者から「実際に体験された方の言葉は、スツと心に響く」との声もいただきました。

「平和を願う千羽鶴」を折るコーナーも設け、多くの方に折っていただいた折鶴は3000羽近くになり、会期終了後、長崎原爆資料館へ寄贈させていただきました。来場者には親子連れも多く、「改めて戦争の怖さを感じた」「平和を守る事の大切さについて考える機会になった」などの声が聞かれました。



来場者に折っていただいた「平和を願う千羽鶴」

むかしのくらし展

「コメ物語」

「受け継がれてきた営み」

会期…令和7年12月13日(土)

～令和8年3月15日(日)



展示会場の様子

世代を問わず親しまれている定番の展示会「むかしのくらし展」。令和7年度は「コメ作り」に焦点を当てた展示を開催しました。

コメは、2千年以上前から、人々の暮らしを支えた食料であると同時に、政治・経済・文化の基盤として重要な役割を果たしてきました。

本展では、そうしたコメの歴史的

な位置づけをふまえ、先人たちが工夫を重ねてきたコメ作りの歩みを、資料を通してたどりましました。踏み車(水車)や鋤、鍬、千歯抜き、唐箕、米穀商引札などの資料や道具の数々を展示するとともに、コメ作りから派生した地域の文化に関する資料も交え、コメとともに受け継がれてきた営みについて紹介しました。会場では「田植えで学校が休みになり手伝った」と懐かしむ声や、親子連れから「2千年以上前からコメ作りが続いてきたことに驚いた」との感想が寄せられ、展示を通してコメの大切さを改めて考える機会となりました。



展示会場の様子。手前に打棚、奥に唐箕・千歯抜きなどが並び

六ツ門だより

わずか一筆の奇跡

— 偶然が結んだ父の青春 —

令和7年度企画展「戦後80年平和資料展—8.11久留米空襲を語りつなぐ—」では、竹村逸彦氏(故人)から寄贈された「軍国少年日記」を展示しました。13歳だった竹村少年が、戦争末期の不安と恐怖の中で記した記録には、学徒動員の工場奉仕疎開、そして久留米空襲の惨状が克明に綴られています。

企画展の広報チラシには、この日記の写真を掲載しました。すると一通の問い合わせが。“日記の一文にある『山本君』とは、もしかして父ではないか”。ご家族によれば、当時お父様は久留米で暮らし、明善中学に在学していたとのことでした。

ほどなく弟さんが展示室を訪ねてくださいました。閉館間際、「まだ大丈夫ですか」と静かに入って来られ、展示された日記に深く目を落とされた姿に、もしかして?と、声をかけると、「間違いありません。父です」と力強く頷かれ「幼い頃から父が語ってくれた戦争の

記憶。ここに書かれていることと、一つひとつ重なります」と嬉しそうに語られました。

竹村少年が仲間の名を記した、その小さな一筆が、80年の時を越えて、ある家族の心に眠っていた記憶を呼び覚ましたのです。

資料が語り継ぐのは、過去の出来事だけではなく、失われかけたつながり、人の思いまでも甦らせる。そんな奇跡の瞬間に立ち会えたこと、スタッフ一同胸が熱くなりました。今回この資料が新たな出会いを繋いだこと。スタッフ一同驚き、そしてこうした貴重な資料が多くの方々に語り継がれていくことの素晴らしさを実感した出来事でした。



収蔵資料の燻蒸くんじょう

7月、久留米文化財収蔵館などの資料保管施設で燻蒸を行いました。燻蒸は、気体の薬剤を用い、文化財に害を及ぼす虫を駆除するものです。大切な収蔵資料を守るため、定期的に実施しています。

久留米市文化財収蔵資料審議会

本市の附属機関の一つで、収蔵資料の収集に関する調査・審議や保存活用に対する指導助言を受けるため、年1回程度、開催しているものです。本年度は、12月5日(金)にエーるピア久留米を会場に開催しました。事務局より令和6・7年度の報告を行い、各委員から補修資料の内容や展示会の成果などに関する質問・意見が出されました。当日の配布資料や議事録は、市ホームページで公開しています。



審議会の様子



有馬記念館で

久留米市の新収蔵資料を初公開

令和8年1月24日(土)から4月6日(月)まで、有馬記念館の平常展会場内で、令和7年度特集展示③「新出資料 久留米藩士福永家資料」が開催されています。これは、令和7年2月25日付けで本市が寄贈を受けた福永家資料のうち、同家の系譜、武術免許状、戊辰戦争の従軍日記、久留米城下町の絵図など、10点を初公開するものです。本展については、有馬記念館公式ホームページで紹介しています。

なお、福永家資料については、本紙2ページにも紹介しています。



特集展示③「新出資料 久留米藩士福永家資料」会場



寄贈相談のご案内

本市ホームページ上に「歴史資料の寄贈について」を掲載し、歴史資料の事例や寄贈の手続き方法などについてご案内しています。

ご自宅の整理で、古い物の取扱いに迷われた際など、ご参考にしていただけますと幸いです。



久留米文化財収蔵館と

久留米市埋蔵文化財センター

いずれも久留米市民文化財保護課の所管施設で、エーるピア久留米(諏訪野町)敷地内に所在します。文化財の中でも、前者は地上に残されてきたもの、後者は地下から掘り出されたものを、主に取り扱っています。

両施設とも、学校の社会科や「くくるめ学」の調べ学習に関するお問い合わせにも対応しています。閲覧・撮影・掲載等の申請は、事前にご相談ください。特に、埋蔵文化財センターには、常設展示室を開設しています。入館無料です。

各施設の開館時間等については、市ホームページでご確認ください。



久留米文化財収蔵館



久留米市埋蔵文化財センター

【編集後記】

数年ぶりに、本紙の編集を担当しました。この間、久留米市では全庁的な印刷製本費削減の取組が始まり、広報や情報発信の媒体は紙から電子(市ホームページ掲載)へと移行が進んでいる最中です。そのような事情で、本紙も前号の12ページから8ページに縮小することとなりました。

収蔵資料の保存活用は、多岐にわたります。今回、紙面に収まりきれなかった内容は、市ホームページに譲り、本紙にはそれぞれQRコードを掲載しています。紙と電子のハイブリッドで「収蔵館ニュース」をどのように展開していけばよいのか、今後さらに試行錯誤が続きます。

『収蔵館ニュース』第22号

発行年月日 令和8年3月31日
編集・発行 久留米市 市民文化部 文化財保護課
久留米文化財収蔵館
〒830-0037
福岡県久留米市諏訪野町 1830-6
電話・FAX 0942-38-6194
E-mail bunkazai@city.kurume.lg.jp

『収蔵館ニュース』のバックナンバーの一部は、久留米市公式ホームページでもご覧いただけます。

